猪太郎物語

六

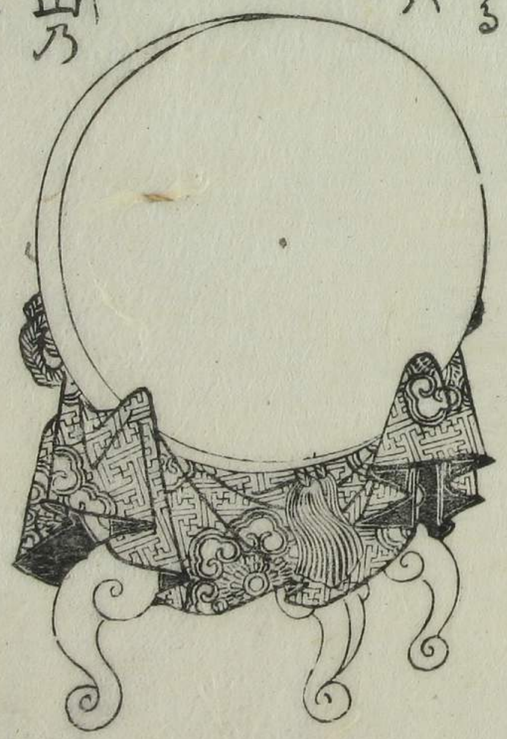
於
180
6

へ13
180
6

東京帝國大學圖書之印
文化
18
6

重寶 冰姿鏡

善をもつて寶とする
古人の格言あり況
んや其徳を
備へる重器乃
類世に少くして
すべらぎ 本朝の
三種の神器唐山乃
傳国の玉璽共に
国家の重寶なり



乙雪ち
梅我
梅の花
昇亭
遠く乃
日也
小村寿
梅梦
與四兵衛

投鼠而
忘器
人狼惡
同干
椅杭
人兇暴
類干
窮奇
寺西閑心

萍乃
流れの
花よ
永く栄り
賑ひ
着せ
金魚
宛鬼
萍花の
阿花娘乃

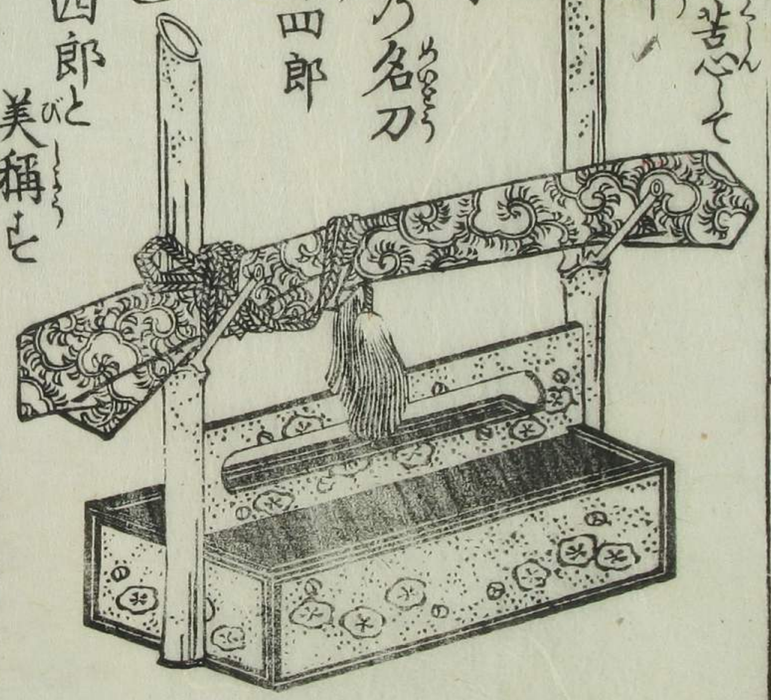
絶海
禅師
化度
成佛
白井
權八郎
下部
袖介

惡漢
鬼平治
與四兵衛
妻
小梅

縮商人
矢三郎

梅堤兵四兵衛ガ苦心ニテ
求められる巻中
第一の品

後宇多院の御宇
建治年間無雙乃名刀
栗田口の住人藤四郎
吉光鎬作の形
とけく切ものの名
世に鎬藤四郎と
美稱セ



梅之與四兵衛物語 後編 梅花春水巻之一

南仙笑楚満人編述

東都

第十一齣 避雨會怨人

楚書曰楚国ハ仮て宝とせ唯善仮く宝とすと伝国ス
王璽あり吾 日本ハ三種神宝千早振る神代ヨリ伝へ来て尊ふ。
故ニ天子将軍ヨリ諸侯太夫の家ニ伝ヘる重器ヲ記ス
ものあらす去程ニ與四兵衛ハ鎬藤四郎の刀を買ひ求めて研屋佐
助ヲ慈ひ賞物を小梅ニ渡せしに予四兵衛ハ一ト日ハ大
きに怒る佐助を引捕へ経美せんと急き石濱ヨリ佐助が家へ
至ル上ハ留守とて戸ざしく有るを絶術なく立帰らんと

もるに早黄昏近く群鴉塒を求る変いとう〻すさまじく折ふし空俄
かき曇り雨降いでぬよいとぐるに集立急ぐ中に彼の女と覚しき人
と綠じ〻らる待乳山の禁を来るけるに雨あられを強く降来雷
のたとめたて聞さへらし〻進退窮まりけるに却説旧鳥袋
文太ハ男体山の山塞まあるに〻〻我ら怨霊夜とゆく日ゆく来て
見ふく今に思ひ〻せんとさも恐ろ〻き顔色おく白眼け妖
原来強氣なる袋文太薄とも世に又のや来るとも生てある内
たゆうまいぞよいてそ我ら物へきそや早く立去るべしと刀を抜く
斬たるのみ只雲霧の如く爰ハ消ると思ハ彼方まあ〻見
前まあるうとさとしハ後一まるく さぬくるるやまりける爲ふ

或日袋文太が部下の盗賊よ。熊太郎といふ者あり〻〻常
陸の国の方へたらきふ行く既りけるが。袋文太が前へ出くるを
けるに小子常陸の国へ〻とある迷蔵へ盗賊に入りて袋人の府
物のいと重ゆふ見へ〻見ば金そやあるとと盗みるとに
見るに着物の小袖二ツ三ツの外たるべ〻ものも見へねど一箇の丸
流あり何とゆ〻〻金ゆ古びく古代の物と見るるにあや紀
品ものと持ゆ〻りまぐり〻〻りとと見るとひらけて行李の中
取りいぐすを見ば何さも古物とおぼ〻く裏ゆ梅の花の形を蒔絵
たるに袋文太と見るとく。心の穏ゆ思ひけるハ消ぬ古蔵ハらく妖邪
を避る喚ゆるとい〻〻這流を傳ふもるば怪異の立去る夏のやと完

熊を貴じ彼境を居間の拉ようけ遂に不義やそ夜ようして
藻の発桟ゆが怪異ふうに来ぐりけるば偖とて我ものを遠ば
這意へ古物ようしてかるる德ありと覚へたりと欲ぶるるのやうに
太郎ようへ多くの金銀をつかはしける。理ようるる這意へ小串貞彼
公唐琴能房郎へ下し賜ふるしば氷安境ようるば彼て笠文太へ
ぐ〜く山塞ようあるとぐ美へ片影の深山ようるば多不自由のるけき
多く明てす暮てす。松風と瀧は春獣の明ようる変のきるば去
きりに盤花のふうう〜く。山塞ようば部下のうちへく名ある盗
ども數くまあづけ。ようへ究太郎以下ようる利ようる山賊七八人を倶く
武蔵の国へ下ようと愛ようる遠留して武士の退糧の如くまを扮部下

を皆悉く家来とよび日毎ようる辺在を徘徊し豪家の家ようしこみ
示美面ようる女を勾引して遠国へ賣渡ようると千万の悪行を振舞
ける。ようく或日浅草の辺りようる呼用ようく兵獨り偏笠涼くまをうる
黄昏ようをびく待乳山の樹蔭をよりる頃しも俄ようる一天墨を流
せ〜ごく急雨盆を傾るようふく雷ようりたることを咫尺の間も見へ
ようず。闇夜ようる美ようぬよ。情れ樹木生茂ようるようる矢込こて
暫し雨を避く居ようるふ又りやや雷きび〜くようる音ようる通りかりし
一箇の男慌ふことを咫笠文太が居ようる辺りへ逃入く。こはも雨を
避ようるうちよ急ごびいと泳し〜ごく村雨のあとをうれを行ど
早日全く暮ようく如法夜のことなるるば注方ようく互ようす〜ようば

めく。つぐみ紀を鈴ぶる。簑丈太うり嚼ふも木下蔭ゑ雨を避し
者あり。三箇ハ路ゆく恐と息をつきさてもあびくぐ紀雷うる
きて孔方達ハ衣服を濡〳〵しふきるハぬうといふ。いろぐ今の大
雨ゑ濡まざ〳〵まぐ。たぐ濡崩のごく芋も羽織も絞るだろう
るありといふ。さ〳〵ぶそこらゑ宮めく落葉ハ枯枝の類ひあつぐし
きあつと氣のあるハ一八火ぐやゑたのめるまぐ幸ひ我腰ゑ拾火打の袋
るるまぐ焚火〳〵て各衣服を乾んあハいろあといふ。二箇ハ女とな
さぐるまゑ落葉枯枝ホをあつむるひまに一箇ハ火打袋の中ゑり火
道具とりいとぐ。いさくゑ乾る枝くゆ〳〵付んとすまぐ。指の糸ゑ焚
付ぐこそ漸く〳〵ふ〳〵て枯葉く火ゑゑりゑ〳〵と見くそ。そろ〳〵一度ゑ燃

立火敷二箇ハ信と頼ゑ合「ヤア汝ハ蠟屋の佐助ゑつくすや」「そ
とゑくさハ與四郎ゑの南無三宝と逃知ぐをそつくと捕へて動とぐ「よく
も最前女とあるとり騙る物渡せ〜横取るの。実の藤四郎の刀
をとうちく渡さく〜と敷圍あらく。雲丈ハ佐助ハ変て冷笑ひ「い
ふ。先ぐ「さて女ちくハ似ても似つぬ赤ゑ物小梅ゑ使分
さのたのと贅全つくゑ世真の正ハ。妻ゑ者つくと持くいるを。渡ゑ女
四郎ゑ怒るまゑ正渡せとゑ。まをうくゑたらひのけゑ足をとも
総立枯枝たろ〜と踏丈ハ急きく者の周佐助ハ間を幸ひゑ逃
んとまるゑ女子四郎ゑ。ちゑ〳〵と言ひ休ゑ。簑丈太ハ見くひゑ
長ぐさくりゑく佐助ゑ腰ゑ帯せ〜刀枝ゑ。佐助ハ女〳〵と

爭へど左右の腕ハ子四郎と引組んで居るとまぶ絶体なる間ゑ
簑文太ハ獨り笑て刀をとろく物をもいはず押裁き豆腐ごとそ
走せ去るとけるゑ佐助ハ猶も子四郎佐助組つころんつほこあいしぶ
佐助ハとてもうあいだと迯出さとを何国までと追ろけ
ちが原来醫師といひ道まどりて走りがこれうちよ佐助ハ後豆
ゆゝして逃延びけまぶ竟ゑ子四郎も退屈ることあるこいぶ主姿を
見ひけるまで塗方あくまどくと其疵ハ病へうり小梅ふもちく
のうを治と歯がみをして怒るとけまどまたべたせうあくさるぐと
佐助が弟を塗義るしけまどのもや何国へ行しやゑ彩ごま
又世ざりけまぶ毎入合ものらそのの俱ふくゑ捨ゐたまハ偖ゐた

簑文太ハ不憤鎬藤四郎の刀吾ゑ戻るとしを敗び渋谷の辺りゑ隠
家を去つらひ性を深ゑとあくゑ名を用ひと替へ西国の去る緒
候ゑ仕へ〳〵身ゑまど練言の入まざるゑ致仕退糧し當国へ帰り
去と投毒し部下の小藏ゑ門人と偽ると剣術の指南を業とする
世をあざむきもちら盗賊をぞたるこらたけるゑ頃爰ゑり程遠ゑぬ
哀ゑ窪とりくら所ゑ彩をゑるべ妙院あまるこありて其娘ひ俗伸ゑ
女閑士百の古ゑもちきくおとるべうもあくゑず警固いそんゑこゑ中
ゑ浦屋と呼へ〳〵ハ一下際棟高く家もいと豪毋ゑ行ゑの拵を
抱へ夜毎日毎ゑ迎ふる客ハ淀の真砂のゑもとも尽ぬ彩粉ゑり這
三浦屋の揺浅樹とゑて大やまこ繁盛ゑ小佐弟といくゑあり蒔雪高

尾をうんどふも立まきりて容貌の風流たるのみ〳〵すなさこの世き
ふく萬の技藝に秀〳〵しく渠が許に通ふ客人は一月二月以来〳〵揚
屋と頼み言ひ入れて〳〵伝後粥〳〵逢ふ〳〵なり這小家ぶ生まれを弱ふ
當国萬師の里に源兵衛とぞ者あり今戸焼とぞ呼る土人形或は
童が喜びの器物ものを似せいでこと自らと是を一荷にして荷ひ賣
あるきしぶ武頃はうる物は東のくふてふ最初〳〵なりけ是ぶ求る
人多くありて思はず家千の残をあけ妻は世をさやく〳〵男女
二箇の子あり兄を袖次とぞ妹を乳里といふ妹は元来捨子に
てあり〳〵ぶ何年因縁の人も弱れ来ようと備とて名をも呉やう
に乳ぶるまりけり形〳〵成長にあるぶ袖次は小藏の業を継ひ

武家奉公を望しぶ竟に縁とそあれ小串の家に唐琴浦左門に
仕へける後小藏は父の負債を扶んと十六の年烟花をあぶみ〳〵
かる暮れを天の感嘆やあるひけん接女多くぶ中に雅なる肩を
ならぶる者もなる程の全盛なり〳〵幸なとはいふものの又幸ひ
ならずや爰に唐琴龍次郎は神奴を縛ひ安房上総下総常陸の
間を仏をづうれ爰に十日逗留して往きは来るきの賑く
に仏をつけくさぶ〳〵なりけれ不図下総佐倉の町なる千本屋
作兵衛といふ遊廓に泊りけるが袖次は近き乗源香取の
社へ詣く来らんといふに打無表龍次郎は長途の労を厭や仏
つねなるねどさるでの夏ふもあ〳〵ねば糸清〳〵て本望を達ふ

祈願をとめんまてと袖乞を毎日しに跡へ細くも長く一箇彼の他
彦蔵が家ふぞ逗留して居くりけるぶ上次郎の商人よ結髪の孫
市といふもの又出来ハ洋ゐ〜ねどこまも国舎ゑト絵を夢げまくあ
ゆく武士の浪人よ亀浦鬼平次といの二箇同じく這くあ恋へ逗
留しそありけるぶ弥市ハ年毎よ此国へ結を賣ふ来まべ必ず麦ま
宣家とまるる〜又ト者鬼平次ハ尚年暗く此家へ来る者と
婦女がたま〜彼の鬼平次ハ色白く青髭ありて未三十余歳の
ゆる者ゆて出るも矢吉さるゑ〜ゆふ処彼うんどもまる奥義を極る
う〜自負まる悟の曲者ゆりけまべ離次郎ハ仲ゑ倘や這奴
養文太ゆ〜あ〜ぎるる早く袖乞ゆ〜ゆ〜ゆ〜

章に出ひて迷ふもあまりどうまく人形屋をたづねあぐねて人ゐけまば何方へも強面のてうけるに此程うり藤次郎が妻より返面きらあてある前髪客よ。お兄ハ人ちまぎと思ひ出すやうけまでさすが處女氣のそまと白地よ言ひ差く顔よ紅葉をあ〜〜けう彼亀浦鬼平次も不年此頃よ思ハ、をうけ。何卒して我ほに入までやと種〜と工夫をめぐらしけつ折しも船橋新宮の祭禮とて爰ホ日こりまでさぐり紀く家毎よユミを尽せ〜燈籠をかゝげ酒肴うそ〜ゐどーてこ弦を借〜まを張ひひん〜かゝるけまば日頃お兄よ心を無〜破落戸彼ハ是無ひと竊よ欲び宝ゆく今青ハ夜宮を見物よ出こうぐ〜人見所よ

待伏〜てよろくかうく日頃の恩ひをたらさんと。六七人言合。待とも来ず。お兄ハ外郎〜〜けまば。婢女一人召倶〜。そこよ爰ちと見あろきく田甫ろへさ〜くらんとまるわどこそあまを。縁〜ゐ〜〜る真ろまば村よ名うその破落戸継橋志間六ま古那のまを古彩ろんどよびるく者をたゞわとして。お兄よろを通ハ世。志ばく〜人を頼ろうきに逃。まこハ金打の折まのどく。彼上古代の科料の文字とやらんよ似く。漢あぐこを能書を送りて挑みこる軍五六箇むらく〜と立ろうまごろ豆ろ温ぶお兄を宙よさくげく。尚ま寂〜き方へ連行けまば。婢女ハ関章まぶし〜我家の方へ立返らんとまろ道あく。たーうく龍次郎よ紛

遇ひしより。龍次郎は山道も途の労まてやすらねど。今宵は祭
礼の夜宮と田舎人の集ふ所の最長あるゆゑ。たゞ一病をもあ
ゆまさまに漫ゆ外面ゆ立出うとこ宴の灯燈汐燈の狂興ゆどうんあろ
きけ。思ひ出も遥ゆ来りけるが最前ゆ女房の娘婦女ゆろも
ゆ。そこ
ゆ行しゆ立まに婦女ゆ向ひ。其下は娘子ゆとも夜宮見物ゆ往ゆひ
ゆとおびゆしゆ出獨り飯りゆ。今娘ゆは先へ友達と伴ゆ返りや
ゆのひゆ一ゆ同まゆく彼の婦女は吐息つき容我を扶ゆゆくと叫ぶ
ゆぞ何ゆゆゆやと易ね同ゆゆ婦女は泪ゆぐら。あゆ一ゆ変ゆも物
語まゆ。激次郎は大ゆゆゆ強ゆ。しゆゆ間遥ゆ西ゆ家ゆれゆ
ゆ。かゆゆ変ゆを吹ゆてゆゆきゆあゆゆ。我ゆゆは無ゆゆ往ゆて

今宵を扶ゆゆ何方ゆと問ゆゆ。婦女は彼ゆを指ゆ。あまゆゆん
ゆる庚申塚を左ゆゆ曲ゆゆ捕の口ゆ東の方の田畑のゆゆへ連
行ゆ。其後は知ゆもゆ。龍次郎は女ゆ時刻
のゆゆ悪漢等ゆゆゆゆゆゆゆゆ。悔ゆゆもその甲斐ゆゆ。
ゆ伝ゆゆゆゆ家ゆ飯ゆゆの由を竊ゆ人ゆ告て逃ゆの人を
越ゆゆゆゆゆゆゆ。彼ゆを捨て走ゆ去ゆゆ。
龍次郎は捕の口の方へゆゆゆゆゆ女の泣ゆゆ変遥ゆゆゆゆ。
ゆゆゆ走ゆゆゆゆゆ。ゆゆは捕へゆゆゆ。ゆゆゆゆゆ強みゆゆゆ
一幾ゆゆゆゆ。一簡の悪漢ゆ襟髪ゆゆゆ。ゆゆゆゆ投ゆゆ

残る奴原出るをさへその息の根
世が叶ぬゆゑと逃なもえ手ず。此
道陸をく踏ひまく要に蔭と逆切
ける瀧次郎ハおゑに掛け起し
る宰ら免を祝しいざおへと身を悲ろ
よ。おゑが謙らくいその瀧次郎よ。今
宵の雜兵を殺てましうう皇がい
とが嬉しく個らずらよ身を全て瀧
次郎を伏拝く。誠よ代日頃妾が家
よ宿てまへどはに飢えれ頼を見ま

ハしきる尋よて物をうれひのちなし
妾もおゑ妾が於る雜兵を敲ひ見ハ
つましハいと嬉しおも一雑兵を酒よ
尽しがくて今の悪漢どもが狼藉
もを悩迷主病のおとうとて一ト事も
あゆみがくて暫時がおのがなを落
つ。討せその後室うととそ殊ひのへ
もうしもよい気ま瀧次郎も在と四ほを
見まハ世が変る吉うる辻堂の軒
端似ぎ様おうく此處の雨ぞうしよ

ゐりたてゝ一と口呑る一宮の草堂あり。と是世ひと龍次郎ハ。
彼の辻堂の橋殿を助け雪。脊をさすりなど殊程ゐろ。お殿ハ最
前ゐり千殺茶般の心労せ。を龍次郎ハ。
思へのたのみゐや。咳こむゐりふ反うくれば。龍次郎ハ仰天し。
めゐ腰中ゐり薬をとりだし。ふくませやいなや。
つゐ休ゐ絵方ゐく。薬を口中ゐろみこぶ口ゐに。
あゐりのゐをくはゐはゐ。とまるもゐで口ゐりへうゐ呑せ。
けるゐ。お殿ハ目を開き。元氣と成ゐ。龍次郎ハ大ゐふ歓び。
殿ハよゐや。快ハ一刻も早く。宿へ送りとゞけやべゐ。
殿ハ尚も苦。氣ゐ悪く未癒の今。ゐろゐろゐらぬゐ。

車ゐ。ゐ。ゐ。

内の男せ三四箇捧千切未を携へつゝ走り来りしが道ゆく龍次郎
お兄を捕へつゝ飯るふあへりしかば作蒲が欲びたゞ多くよ物あく早速
同屋して家よ飯り新よ酒肴を注梅して龍次郎よ云ふ今宵の
楚を謝しけまば龍次郎も甚迷惑しいつでゝ墓兄あみをりゝもる妻の
理ならや義をんゝ せぎるふ君子の常ありうそどりの妻をるせ云ふ
で紅を宮ふるうと固辞ぶ強ぎ寧く管待しこまてうしてハ一入龍次
郎をバ心をつけくとぶめけるかゝまけまば龍次郎も社仇が赤飯ぬといひ
お兄ぶ表よ引さまこ考よ遮面のうち夜毎ゝ婢女がゝ[illegible]よお兄ぶ国へ
再びこりるに中とるりにけるを寝よ又彼の俳ト者鬼平次ハ或夜更こけ
て飯りんるに龍次郎ぶ家へむまゝくゝ[illegible]の蝉ゝ[illegible]で荷物の紛失

を枕のあゝりへあてゞひ人の寝るどくゝ[illegible]ハあゝぬまとハ[illegible]
と奥の方へ枝呈して行んるに浪ぶ国とあゞりきぬまて何やらん寝ゝ
嘶の音ゆあるに怪しやとそろと襖の間より窺きゝ見まばこハいかに龍
次郎とお兄と一夜具の中よむつまじ光景よ鬼平次ハ胸りゝ憤
這小童いつしら浪と密通してありけるよ和吾ゝをとりけゝ女を人よ
魅せらまゝとそ安うくねよしく我又一計をめぐらゝ浪ぶに恨を
むくまでゝ安ゝと浪を猶をおゝ走づめまどゝくと我寝所へ立飯りそ
ぬふりゝて寝こりゝぶゝの中よ思ふふとても龍次郎とかる
沢あるうへハ尋常の妻ふとハ我心ハ従ふまゝ思ひ上ハ左斬を見
金ゝ お兄を豪奢ゝて走らんとハ肚裏よ思案ゝ密よ龍次

郎が包みのうちを開き常に持てる銅草入をうばひとり何食わぬ顔
にて、遊女原のどくまして、あるけば、龍次郎も何所へか立しのの
ちらんとお橋をあるけるあど鬼平次又思ひけるハ今お花を捜ひ行とも
合点ばかりしくハ絵術なるらん奈何ともあく多分の金子を渡へ
と思ふ幸ひ相宿なる弥市ハ去年寝藤へ貸おきたる結
どもの價をあつめ金数九三百余ばかり残布よ入まく首よ魯子の法
某の日ハ故々へ立飯り又く冬の切よ寄るとう〳〵龍次郎鬼平
次ハ共ども酒げく別まの酒吸うハまを鬼平次ハ弥市を受そ最名
残おしき夏なる新く什月頃同ふよ物ハ夏あまし〳〵身の。ほろまてんハと
愛けまで故々ふくも嘆う〳〵待維くもんべ〳〵と最行嶺よ四方

八方の物語して夜ハ深く伏しぬかくく次の日龍次郎が奴僕
助も立飯りしぶ思ハざる夏ようて眠どり〳〵を物語るに龍次
郎ハ又鬼平次が夏を明きまあや養文太よりやと思ひ汝がくるを
待ちびしといふよ袖吸ハつらく鬼平次がさるを見るにいくも一曲
ある藻とハんあまで養文太ハあ〳〵ぎまぶ身と龍次郎よ若ぶぬ
長遠面せしうハつ列す早く武蔵の方へ立越ふ四三陽どのよ面會
ふ〳〵其上ふく又ともふすもまぶ〳〵と意ようよ催促ふぞ不得よ応と
沢ある夏ハ袖吸ふも言ひうねく強〳〵けまぶ明日とも出立せるす
其日ハ弥市ぶ飯玉せとふ日と同日ようけまぶ鬼平次ハ若ふ〳〵
たうとふ中よろとび居ようけるあく弥市ハ夜深きよ起ふく

仕度をしてのち鬼平次龍次郎ホよ眠ゐして立出ける頃ハ明け七ツ時ゐ
みてやあらんとおぼ〳〵けまで歩くより様〳〵後の日を送る身ゐまで。
とてもせず。灯燭り少灯燭提くゐの本屋をぞ出よける。龍次郎袖助
ゐハ郎特別といひ孫に行先を尋ねもあらさまで寛く發見せ
んとて除よ孫つまぬ鬼平次ハ仕体所ゐをとくとんまとゐ〳〵小用を便〳〵
ふ知るふりをて路を迷ひ追々けるぶ漸く並木の松原の近く出て見ゐに。
遥先へ行人影ハ淫よ江市ゐくんと追ひけさゐ物をもいまぞ後ゐ肩
先深く切るとあぶとゐくとも意者ふりゐくり何奴ゐまでだまゐ〳〵対ふ
ひきゐうゐ様と様合せ二ゐ三ゐうち合ゐ初太刀の深ゐに注方ゐく。
つの終よあくゐくゐりふけゐ鬼平次ハ大きゐゐとび懐中を探〳〵三百両奪

取ゐかれて盗みゐ〳〵龍次郎が煙草入を見繋のそばくゐとゐ。仕合
ゐと揺り笑慌ゐ人ゐ並松の小闇ゐくふ人の立く居る体よ揺〳〵。
何者ゐやと刀提ゐ立のゐぐら星ゐあゐゐよゐ〳〵月ゐ人ゐ見ゐ右ゐて
眺ゐる地蔵の姿ゐゐけゐ鬼平次ハ注笑ひ疑ひ思ハ闇鬼ゐ生ゐ。
行倒ゐ帰ゐ怪ゐと見ゐる我まぐ修行の足〳〵ぎゐゐゐけゐ保地蔵ゐの立ゐ
必ゐと人ゐふゐかゐゐゐひゐと戯ゐけゐ急変ゐあゐく已ハいゐねゐ我
いゐゐと宣ハ汐ゐ再揺り偖ハ四下よくゐありやと刀を後の鞘ゐ〳〵入
てさぐゐゐ後ハ松風ゐゐらぬゐ。おゐのゐゐめゐ〳〵偖ハゐの立ゐ人の選び
ゐかゐゐハ義もありけゐゐと立去ゐんとゐる折〳〵も来ゐ来ゐ二人の
旅客ゐあゐひ近くゐゐまに人ゐ灯燭を切り落〳〵暗

道を辱し又る事を歎り裏の垣根をおどりこへ縁く雨戸を明け
あ〜所さう無び入り我家に外〜居るを考るの事なるべけり。
地蔵尊のものの〜ひ〜と往く渚書を見へまこと俚人の呼得る義と
吸く夜活の一助とするの歴よ〜或云武蔵谷堤なる吹上なる
所の地蔵尊なるべしこれ
此説唐土の小説の中より似る夏見へ〜見ばこれ〜て和俗の説
拠とするの〜意歟事再あり云の言とい〜る當時の人情を察へ
たる偶言ま〜〜えら這の寒まあり之せん奉獲まこと閑結他題
備も夜明く往来の人紙市が死骸を見つけ早速代面を縣令へ約へ
けるば刀富の役宿さ〜あさ見けるに加の紙人い駈市が死骸をあら

ため〜に全く刀ふく切殺〜こりを見へこるふ懐中をあ〜こりたる書物
等にこ〜ふ本屋より寄食せ〜る明白なりけるを即時あ本屋作
兵衛を〜こ〜せるよ〜ふも昨夜之私方より泊りたるの今紙
早く之一金を持来る〜發見せ〜りを伴る言上るしけるを備ハ
盗賊ありこつけ来り三百金を奪ひ殺〜て之去りとのあらんと
尚こまぐとそ〜こ〜あるを探〜求るに一箇の提網家入のあと
けるば縣令の役人ハ俚蕩が弟へ之を出〜汲ふる覚へあやと
問へよ。俚蕩ハ身にとり見てあるば日頃激次郎が持こるふ遠
孫ばたつと寄きさ備ハ彼のあ流こそ盗賊ふく紙市が今紙早く
大金を所持して發見せるを彼あとこり已も出来て両箇ふて斬

殺し三百金を奪ひ取るべし。理なる哉日頃こゝろ國所をも委しく
語らざりしに何の活業もなくて妻娘を損傷ゆして居る妻を
ひろね家来と見へし輩の云へし何方へか行てあるやも不審なり。
渠こゝに是こゝに盗賊なりとこゝかしこを尋ねるに龍次郎が妻と言
上をけるに成程こゝに盗賊なるべしと真さる組子を八方へつかはけ
ば探し求めけるに早時刻うつりて龍次郎夫婦は行方の道を
失ふる妻子ども絶えず追留る妻雖く組子ハ何を空しく去し既つるぬ。
かうとけるに異常次ハはとるべしたるとこゝのうちふとろもび遊もあ
らばあるを豪奪て去るべしとをつけく窺ひけるに妻子を
見めしへ令娘ものが身の上なりるこゝろ漏ゝり龍次郎と仮初の契り

けるに龍次郎も大ゆをうへし身なるに。ものが死ぬも実の國所をば告げ
ざるに継母の誘ふをうく国遠てあるに成ゆて仮ゆせハ身をむく
取るべしとよ紀程おいしへくあるを実とおろく居こりゆ豊
たるらんや龍次郎ハ盗賊ゆく弦市をころし三百金を奪ひ去退
去と成あるゆもあるに昼歌浪ゆのみうきに居こりしゆ沖も
知くても去る邪なるくと二世の契をむすび上ハ存命ありて
父母ゆ孝を見ん世ゆ存ゆ探をあるハすべしこゝやゆ
いろゝ悪人ゆも世ゆ夫ハまゝと知をさゞめ或歌とまぐくと女の
を書綴し自ゆ伏してなるうくりけるゆ是飛もゆ家内の人
ハ歌何ゆ紀ものが紀ものざるを不審ゆもし国所へ見るとをいゝ

ふ。血まなこみひらき居るを見て父母い周章ふてゝあれ走り来り死
骸を取りつき何由なの自害ぞと狂乱のごとく歎きうらみもこゝろ家
内の男女も上を下へと騒ぎたちそとらあつりを寄るに蒲団の上に
何なりと書るものあるを見て安心し急ぎ選ぶ中に一通の書状
を見てみるに恋慕の思ひ深く浦島の
ものうく月日を送りしかくて浦島
海へ出ること年月を養育のゆえなるに
のうまの言葉まことにわれ養育
恩分ぬるとなくなべてうちよりもうい
ちふれうべうこれ命あるうちに父母のおもふ
なべてうのおもいでなるべうふあ

めうまてわれ子ぞ門ふ巻をあらうべうふ
おもうゆゑをいつぞやうう遠国にて死ぬ
ゆゑをとゝ二方とも五尺ほどの船ばた
はやうの母を見て神宮のゆゑう
ものけうのもも父上と上の二目を見ひ
海へ出しうを豊玉ゆゑ龍宮の
妻縁の林はうあるを身をよ分ふ
うとおもふ海市
のものとうゆゑをふうの美食をうべ
ふくうを鶴を焦しまべきべ
めうまてわれ子ぞ門ふ巻をあらうべうふ
おもうゆゑをいつぞやうう遠国にて死ぬ
ゆゑをとゝ二方とも五尺ほどの船ばた
はやうの母を見て神宮のゆゑう
ものけうのもも父上と上の二目を見ひ
海へ出しうを豊玉ゆゑ龍宮の
妻縁の林はうあるを身をよ分ふ
うとおもふ海市
のものとうゆゑをふうの美食をうべ
ふくうを鶴を焦しまべきべ

母はゆるしの心思ひ遣りの世話を天地にあくみ申し
たるあるべきやうんと思ひ入れ申し候へども
あらぬ思ひ入りの高さ思ひ遣りの世話に
恭しく入りたべまどうの海ひたくいくへくいたる
夢の間を月日まんまんせんうういまを忘れ
彼しまへうをやしまるのいと哀れまで涙と
筆にたまるもまるもすあくくこ様しまるう
たびくこ言葉の絵巻まとあんあれあるあるしく
つ屋人のいろうをいぎこんんちちにの

みうう人母うへ
斯くまこあくあっとけまば。他を婦夫婦ハ日ごとだりハ浜出し保ハ
ひ〜〜童のよ子思ひ居るが。瀧次郎どのと女こんまあ流容まこ
うう〜〜日ごとまこうりけるう今ハ思へバ瀧次郎どのと女らいふ
きて盗賊をたちらくべき人ふよあ〜す在今ハ屋ひけ出よ〜ぬと思へ
ど。父よ悪ひあるものハ必面体よあ〜ふ差ぎる在〜〜加之盗賊をん
たらくなどうこうバ。娘よ案内させく我家の物をも盗まれまこうう
もうれを思へバ彼者ハ倶不裁天の族うこんもたろう羅〜〜五五返て
盗賊ふ〜んと縣令へ言上せ〜ハ癖ま〜け差て五五引うへ今ふ返
出てあるト者鬼平次と女こんが面魂の只者きこずはあるのみ。

折と懐中物衣服の類を落客する奪る体なるべし。巣を注義
せば娘が仇をとり。龍次郎どのと女こんが濡衣を干次するなれども
あしざるべしと。鬼平次が居る座敷よりうち見るに鬼平次が此
強動をゆるく打角ゆしを奪し。娘お花自害せしうへは也居ども
注ゆしと荷物を取り去らんとせる体を備こそ爰を逃れ
とせるは塗絨を扱まりとなる所屋敷物を手に向ま
取りつかめば鬼平次は一生無命と庭へ飛びおり。後来物を手に向ま
かざしよらば斬らんと身構へ。こうして勢ま屋敷をきしに呂遠巻にて
ぞ扣へける。その内まを見て紙毒いは鬼平次が荷物をあらためる。
案のごとく紙布ま入れるまく。二百両の金子ありけるば備こそ龍

時ま孫寺へ折へけるは。孫寺の組子大勢十手をふりあげ。鬼平次を
捕め取らんとひしめ。ひしめ。ひしめ。

よゝを告げ越せしゝ。たゞ跡市ゝ想蔵へ何方へ行しや豆ずとの
変ゐ是ハ往方ゐく。その侭ゝ手捨おきね。

梅花春水巻ゝ一終